



セントマイケルズ城の虜

藤村裕香著
イラスト 羽田共見

セントマイケルズ城の虜

《立読み版》

藤村 裕香

イラスト 羽田 共見

父親と母親が事故で亡くなったと、彩世あやせにイギリスから国際電話が入ったのは、昨日の夜のことだった。

高齢の祖父母は海外に行くことが難しいので、彩世一人がイギリスに行き葬儀に出席することになった。

彩世の父親はイギリス人で母親は日本人である。

父親の仕事の関係で両親はイギリスに暮らしていて、彩世は幼い頃に日本に住んでいる祖父母に預けられた。

容姿がほぼ日本人と変わらないし、幼い頃から日本に住んでいたので、彩世がハーフだと知らない人たちも多い。

幼い頃は自分一人で海外に行けないのでしかたがなかったが、自分一人で行動出来る年齢になっても、不思議と両親に会いにイギリスに行こうとは思わなかった。

幼い頃から祖父母に預けられたのが、心のどこかに引っかかっていたのかもしれない。

しかし、こんなに急に両親が亡くなると解っていたら会いに行つたのにと、後悔していた。

空港に着いた彩世は、公衆電話で日本に電話をかけてきてくれた長谷部はせべに連絡をする。

空港まで迎えに来てくれるはずなのだが、彩世には見つけられなかった。

「彩世様ですか？」

こちらの特徴を伝えてからしばらくすると、背の高い若い男性が声をかけてきた。

「あ、はい。長谷部さんですか？」

彩世は、彼をじっと見て聞く。

電話で話した時は、もっと年配だと思っていたが、目の前にいる男性は二十代後半ぐらいにしか見え
ない。

切れ長の奥二重で、あっさりとした顔をしたイケメンだ。

「はい、長谷部光輝（こうき）です。どうぞよろしくお願ひします」

長谷部は、手を差し出す。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

彩世は、握手をしながら深々と頭をさげた。

「大学生と聞いていましたが、高校生ですか？」

長谷部は、真面目な表情で彩世に聞く。

「二十一歳の大学生です」

彩世は、眉根を寄せて答えた。

外国人の血が混じっているのだから、もう少し大人っぽい顔でも良いと思うのだが、彩世は自他共に認める童顔である。

髪の毛は真っ黒だし、目はくりっとして大きく、瓜ざね顔で、凹凸も激しくない。

イギリス人の血が混じっていると思えるのは、目の色がオレンジがかっていてモザイクのようだということがぐらいだろうか。

「失礼しました」

長谷部は苦笑しながら、彩世をタクシー乗り場まで案内する。

「長谷部さんは、父の仕事の部下？ それとも、母親の知り合い？」

彩世は、タクシーに乗りこみながら長谷部に聞く。

「いいえ、私は彩世様のお世話をする為に、フランス様に雇われました」

長谷部は、軽く首を振って答える。

「フランススさん？」

彩世は、首を傾げた。

聞いたことのない名前である。

「はい、彩世様のお兄様です」

長谷部は、さらりと答えた。

「えっ、兄っ！」

「彩世は、思わず聞き返す。

両親から、兄がいるなんて話は聞いたことがなかった。

「はい。お父様が亡くなられたので、男爵家を継いで城主になります」

長谷部は、さらに続ける。

「男爵で、城主！」

父親が男爵だったことも城に住んでいたことも、彩世は知らされていない。

彩世は、激しく混乱していた。

駅までタクシーで行き鉄道に乗り換え、ロンドンから五時間半かけて、やっと目的地に到着した。

到着するまでに長谷部に聞いた話だと、どうやらフランススは、父親の前妻の息子のようだ。

根掘り葉掘り聞いてみたが、長谷部も最近雇われたので、詳しい事情はよくわからないようである。目的地についたのは夜の七時をとくに過ぎていたが、まだ日は高い。

「この時間だとまだ城には行けないので、町でお夕飯でもいかがですか？」

長谷部は、腕時計を見て確かめる。

「いいけど、まだ行けないってどうして」

不思議に思っ、彩世は聞く。

「干潮にならないと、島には渡れないんです。昼間なら船も出ていますが、この時間ではもう終わっています」

長谷部は、説明する。

「島に、城があるんだ」

潮が引かないと行けないなんて、随分ロマンチックだと彩世は思う。

駅の駐車場に止めてあった長谷部の車で、街に向かう。

駅からは車で五分ほどの港町で、白い外観の建物が多く、商店の他にカフェやホテルなどいろいろと揃っていて、思っていたより大きな街である。

街の近くには遠浅の海岸線がどこまでも続いていて、夏は海水浴客で賑わいそうだ。

「辺りが明るいうちに、本土から城を見ておきませんか？」

長谷部は、彩世に提案する。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

セントマイケルズ城の虜

《立読み版》

発行日 2011年9月16日

著者名 藤村 裕香

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Hiroka Fujimura 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。